近世日本地理学の性格と現代への意義

——山片蟠桃・司馬江漢を中心にして——

小野菊雄

【要約】十六世紀中葉からのヨーロッパ諸国との交流を契機として、天文学的理論・世界知識・世界地図などの分野を開拓されたわが国の地理学は、いわゆる蘭学の興隆によつて、地動説などのより新しい展開をみせはじめた。この十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、この様な地理学を学んだ人々の中において、町人階級である山片蟠桃や司馬江漢は、地理学の重要性への自覚、近代科学精神への接近、封建社会への批判など新しい思想形成の方向を示しはじめていた。しかし、幕府による科学統制と知識人内部に存在した様々の問題は、結局、その様な市民階級からの発展の芽をつみ取り、地理学も又、支配者の為の科学としての任務を背負わされたのである。この様な近世地理学の性格を考察してみる時、我々はそこから明治以後、そして現代のわが国の地理学を考察する上にも若干の示唆を得る事が出来るのではないだろうか。

はじめに

地理学がその生成から現在までに有してきた様々の問題点をひき出し、それへの緻密な分析をおこなうことによつて、現在更に未来において地理学が持つべき或いは持ちうる様々の問題を考察し、科学としての地理学のより一層の発展を押し進める為に、地理学史の研究が有する意義は非常に大きいものがあるだろう。特に現在のわが国の地理学が、第二次大戦中からその直後に至つて落ち込んだ混沌たる状態から、現代社会において意義のある科学としての方向へその歩みを押し進めているのではないだろうかと考える時、それは、より一層大きな比重を持つものであると言えるだろう。

ところで、わが国の地理学の歴史をふり返つてみると、

古事記・日本書紀・風土記等々にその源を見出す事が出来るだろうが、体系的な科学としての形をとりはじめたのは、十六世紀中葉からヨーロッパの地理学がわが国に移入される様になつてからであろう。当時のヨーロッパからの地理学は、現在では天文学などの領域に入れられている地球や諸天体の形状や運動の理論、現在の世界地誌ともいうべき世界各国の歴史・気候・産物・風俗などの知識、それらを具体的に表現した地球儀や世界地図等々を含有していたのであり、それ故に多く天文地理という名で呼ばれていたが、その地球球体説や天動説をはじめとする様々の知識は、それ迄の日本人の宇宙観・世界観を根底から揺り動かしはじめたのである。そして、江戸時代中期におけるいわゆる蘭学の興隆以後は、天動説にとつて代つた地動説とより新しい世界知識がわが国に移入される様になつたが、この頃から次第に、これを摂取する人々が、単なる知識としてのみでなく、その根底にある実証的合理的科学精神を吸収し、或いはその世界諸国についての知識からわが国の社会に対して様々の批判をおこなうという新しい科学思想・社会思想への発展を示しはじめたのであり、それは、幕府の鎖国政策に対する批判などに最も顕著な例を見る事が出来よう。①

わが国の地理学は、明治以後、諸外国の地理学を続々と移入する事によつて、一応、近代科学という衣装を身につけたのであるが、それ以前の近世、特に以上の様な性格を持つ蘭学興隆以後の地理学について考える事は、明治以後の地理学、そして現代の地理学の性格を分析する上に何らかの意味をもたらしてくれるものであろう。

この様な考えの下に、この小文では、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、地動説をはじめとする前記の様な地理学の摂取と啓蒙宣伝に努めたといわれる山片蟠桃と司馬江漢という二人の町人階級の知識人を中心とし、その他若干の人々に視点をあてて、彼らがそれを如何に消化・吸収していつたかを考察してみたいと思う。ただこれらの人々については、文化史や思想史方面において多くの研究がなされており、ここではそれらを大いに参照させて戴いたが、②筆者の浅学の為に、この小文が、それらの単なる二番煎じに終りはしないかという事を甚だ恐れるものである。

I　蘭学以前の天文地理学

一五四三年のポルトガル人の種子島漂着を契機として、ヨーロッパの科学・技術はカトリック宣教師達によつて続々とわが国にもたらされたが、天文地理知識は医学などと共にそれらの中心を占めていた。[3] その知識は、宇宙・自然観では未だ天動地球説と Aristoteles の四元素説に立つていたが、それ迄のわが国における神話的世界観・仏教の須弥山世界観・儒学の渾天説や天円地方説等々に比較すれば、円と数による巧妙な幾何学的論理によつて、はるかに強い説得力を持つていたとみられ、それ故に儒学者などが懸命に反論を浴びせる必要があつたのである。[4] 又、有名な Matteo Ricci の世界地図をはじめ多くの地図や地理書が世界地理知識として移入されたが、それらは、従来の日本人の三国世界観を書き改めさせたのであり、又、日本人自身による朱印船貿易などが、更にそれを推進させたのである。[5]

しかし、鎖国体制の完成によつて、これらの知識の移入と発展は停滞を余儀なくされ、それは八代将軍吉宗の時代に至る迄の約一世紀の間にわたつて続いたのであるが、[6] この期間における主な天文地理書として常にあげられるものは、向井玄松の「乾坤弁説」(一六五六年)、西川如見の「増補華夷通商考」(一七〇八年)、新井白石の「西洋紀聞」(一七一五年)、「采覧異言」(一七一三年)などであろう。玄松の書は、天動地球説と四元素説理論の訳文とそれに対する彼の反論から成り立つているが、彼の基本的立場は儒学観念であり、天動説や地球説は認めるけれども、それは例えば、儒学における「天円地方」の「方」は、「方形」ではなくて「東西南北」の「四方」の意味であるなどと言う様に、あく迄も儒学理論から認めるものであつて、それ故に儒学の陰陽五行論と異なる四元素説による理論には全て反対するのである。[7] 如見の書は、日本人による最初の世界地理書ともみられるが、そこにおける世界地図やその他の記載には、Ricci などによる知識からの発展はあまりみられない。彼は又、「地理モ天文ノ一端」と考えて天文の研究もおこなつたが、その基本として「命理」と「形気」の二つの天を考え、具体的な天である「形気」の天学におけるヨーロッパの実証的研究法の必要性も主張したが、二つの内では、やはり「命理」の天学即ち儒学による天道・人道の習得が優越する事を認めたのである。[8] 白石については改めて記す必要はないだろう。彼が、わが国最初の体系的世界地理書

といわれる「采覧異言」を書き、不明なる事は成る可く排除するという態度から、従来考えられてきた南のメガラニカ大陸の存在に疑問を提出する等々、日本地理学史上に占める意義は可成り大きいものがある。更に、彼はキリスト教とヨーロッパ科学を分離し、後者の優秀性をある程度認めたのではあるが、周知の如くそれは、「形器」の上についての評価であり、「形而上」においては儒学の優位を主張し、その宇宙・自然観も渾天説や陰陽五行説から一歩も出ていないのである。[9]

十六世紀中葉からわが国にもたらされた天文地理知識は、わが国の人々に可成り取り入れられたが、その受容態度の根底には、儒学観念の優位が存在しており、未だ新しい思想への方向は見られなかつた。この様な新しい方向を生み出すという課題は、白石が没してから半世紀後に出版された「解体新書」をその本格的出発点とする蘭学に課せられるに至つたのである。

Ⅱ　蘭学の興隆と地動説の移入

八代将軍吉宗による封建経済強化の為の殖産興業策、或いは暦の改正や吉宗自身の趣味などから、ヨーロッパの実用的科学や暦学の移入の必要が生まれ、それは一七二〇年の禁書緩和令となり、オランダを通じてのヨーロッパ科学の摂取、いわゆる蘭学の興隆へと発展した。[10] 天文地理に関する新しい知識も、この気運に乗つて次々と移入されたが、その内で最も重要なのは、地動説の移入と日本人によるその把握であろう。[11] ところで、この理論が初めてわが国に紹介されたのは、長崎のオランダ通詞本木良永が訳した「阿蘭陀地球図説」（一七七二年）においてであると言われるが、彼は又、「天地二球用法」（一七七四年）「太陽窮理了解説」（一七九二年）などでもそれを記した。勿論、これらは只の訳文にはすぎないが、「太陽窮理了解説」中の「和解例言」において、ヨーロッパ天文学が Copernicus から Kepler・Galilei・Newton に至つて完成し、それによつて天動説は「古学」となり、地動説が「新学」であり、[12]「実説」となつたという解説を附すのである。当時の長崎に住むオランダ通詞達が、ヨーロッパ科学に対して優秀な理解力を有していた事は周知の如くであるが、[13] その長崎で科学書の翻訳に従事し、優れた科学知識を示した事によつて日本科学史

上に特筆すべき人物とされるのが志筑忠雄であり、特に「暦象新書」（一七九八年―一八〇二年）によつて地動説紹介に大きな役割を果した事は、彼の業績の最高のものと言えるだろう。この書は、Newton のいわゆる「Principia」（一六八七年）をその根底としている為に、[14] 万有引力の法則・太陽系へのその適用、或いは Kepler の法則や重力の問題等々、当時のヨーロッパにおいても相当に新しい知識に満たされ、それに加えて志筑が多くの注釈を記して、従来の天動説の誤りである事などを的確に指摘しているのである。こうして彼は、地動説に従えばNewton の法則と実際の測定値が合致し、「地球も五星の如くに、太陽を繞るなることを悟りぬべし」と説くのであるが、他方、これと儒学理論との折衷に多くの苦心を払つている。即ち、中国の儒者は、ヨーロッパ人より早く地動説を説いているとか、天から見れば地が動き、地から見れば天が動いているのだから、「動が地にありと言んも可なり、天にありと言んも可なり」と記し、或いは「形体を以て言へば、地は円にして動なり、道徳を以て言へば、地は方にして静なり」とか、引力の引力たる所以の者は「不測」「霊妙」であつて、天体についてのヨーロッパ人の「命理」は「不測」である等々と記している所に、それが明白に現われている。この様に彼は儒学とヨーロッパ科学の両立に努力するのであるが、天文理論に関しては、天動説は「観象の言」、地動説は「察理の言」であるとし、精密な実測を加えて完成した地動説は、「従来、幻妄無拠にして徒に人を惑はすものの類とは大に異なるべし」という主張をおこなうのである。[15] 志筑は、儒学理論を完全に乗り越える事は出来なかつたけれども、本木にはみられなかつた引力などの説明を加える事によつて、地動説を科学的理論として紹介し得たのであり、これらの人々の住む長崎へ、江戸をはじめとして全国からの知識人が訪れ、通詞やオランダ人から多くの知識を学びとり、ヨーロッパ科学を全国的に普及せしめる事となつた。地動説を含む天文地理学も次第に全国へ浸透していつたが、それは彼らの間に新しい思想形成をもたらす大きな可能性を有していたのであり、その可能性の実現が最も容易であつたのは、封建的規制から比較的自由であつた町人階級に属する知識人においてであつただろう。そこで次に大阪の町人山片蟠桃と江戸の町人司馬江漢を取り上げて、その面

について考察してみたいと思う。

Ⅲ　山片蟠桃の天文地理学とその思想

一

山片蟠桃（一七四八―一八二一年）については近年多くの研究がなされており[16]、ここでは彼の経歴を改めて記す必要はないだろうが、一応、彼の社会的地位と学問の背景には触れておかねばならない。彼がその名の示す如く番頭として活躍したのは、当時、大阪にあつた米問屋升屋において であり、その功績によつて主家の親類次席にあげられ、升屋小右衛門の名をもらうほどであつたが、この様な彼の経済活動の中心は、各大名との間の米を主とする金融取引であつた。その内、最も緊密な関係を保つたのは仙台藩とのそれであつて、仙台藩が領内の農民からその貢租残米を買い上げ、それを江戸に廻送して販売する過程において、買米本金を調達し、廻送・販売を一手に引き受けたのが升屋であつた。要するに升屋は、これら諸藩との取引、即ち幕藩体制に寄生し、それを利用する事によつて巨額の富を得たのであり、「此節升屋平右衛門ノ番頭ニ小右衛門ト云大豪傑出デ升屋ノ身代ヲ甚大キフセリ」と言われた様に、その中心となつたのが蟠桃であつた事には注目しておかねばならない[17]。この様な仕事のかたわら、彼は懐徳堂において勉学に励んだ。懐徳堂は周知の如く、中井甃庵と大阪商人達によつて設立されたものであるが、蟠桃が学んでいた時は、甃庵の子竹山が学主となり、その弟履軒などと共に教授に当つていた頃である。その教科の中心は、儒学の中心たる朱子学であつたが、竹山の学風は可成り柔軟であり、学堂も自由な空気に満ちていたと言われる[18]。蟠桃は、ここで儒学などを学ぶ一方、麻田剛立から天文学をも学んだ。杵築藩医であつた剛立は、天文学の研究を続ける為に脱藩して大阪に逃れ、そこで研究に専念して有名になり、後に幕府の改暦事業に際しては弟子の高橋至時と間重富を参劃せしめ、その学統というべきものからは、至時の子高橋景保及び渋川景佑、そして伊能忠敬等々の俊才を生み出した人である。剛立は、志筑などと共に当時のわが国最高の天文学者の一人であり、それ故に蟠桃が彼から学ぶ所が大きかつたとみられ、又、重富や江戸で蘭学を学んで来た町人橋本宗吉等々の多くの人々との交友によつて、蘭学による

新しい知識も多く得る事が出来たであろうと考えられる。[19]
以上の様な基礎の上に、蟠桃がその晩年の一八〇二年から一八二〇年にかけて書き上げたのが大著「夢之代」である。この書においては、様々な面についての彼の考えが展開され、その天文地理に対する理解、そこから発生した思想、それと他の研究との関連を見る上に充分な資料を提供してくれている。それ故、ここではこの書によつて彼の論を見ていく事にする。[20]

二

「夢之代」の巻一・二において蟠桃は、天文地理についての記述をおこなつているが、まず天文論の中心をなしているのは、地動説理論である。彼は最初に神道的宇宙観・須弥山世界観・渾天説を説明した後、それらが全く取るに足らない論であつて、「其愚及ブベカラズ」などという痛烈な批判を随所に記し、これに対してヨーロッパでは「ソノ実地ヲ踏ザレバ、図セズ云ハズ、天文ノ如キハ海外諸国ニ往来シ、測量試転シテコレヲ云ユエニ、大船ヲ艤シテ万国ニ抵リ、天文地理ヲ正ス」のであつて、それによつて現在、地動説が出て天文理論の正論とされる様になり、前記の様な神仏の説などは「西洋人ニ見セタランニハ、三歳ノ小児ト雖腹ヲカカヘテ笑フベシ」と言うのである。要するに彼が地動説の優秀性を認めたのは、それが実測・実験などという実証的方法によつて完成したものであるからだと考えられ、この書においてその理論を展開するのも、神仏儒の実測によらない「井蛙ノ愚術」とそれを比較して、その優秀性を明かにし、「愚蒙ノ人ヲサトス」為であつた。彼の地動説に対する説明は、志筑の「暦象新書」を参考にして引力の説明などを加えた可成り詳しいものである。尤も彼は、志筑の「引力は不測である」とか、天動・地動両説は「一定シテ論ズベカラズ」などの論もそのまま引用して、天動説は「観象ノ言」で「性命」を主とし、地動説は「察理ノ言」で「形体」を主とするから、両説が異なるのは当然だなどと言うのである。この点に、如見や白石以来の儒学とヨーロッパ科学との並立という観念がみられるのであるが、蟠桃は、志筑の書には若干見られた陰陽五行論と地動説との関連づけは殆んどおこなつていず、地球よりも大きい太陽や他の惑星が動くのは疑わずに「地球ノ動クヲ怪シムハイカナル心ゾヤ」などと天動説論者を大いに批

判するのである。[21] 彼は地動説の他に、この宇宙には他にも我々の太陽系と同じ様なものが存在し、そこにも「人民」が住んでいるかもしれないという中々興味深い説や暦・天体現象・自然現象について多くの説明をおこなつているが、その大部分は、今日からみても可成り正しいものであり、特に陰陽五行論による現象説明が殆んど見られないのは注目すべきであろう。[22]

ところで、この地動説を中心とする天文更に地理という学問自体に対する彼の考えは、「凡致知格物ノ大ナルハ天学ナルベシ、大抵理ヲ究メ性ヲ尽ス」とし「仁義礼智忠信孝悌」の「人道」の根本が「天」にある以上、「天学」は最も重要なのだと言う所に明白に現われている。そして、日本人はオランダ以外については何も知らぬのに対して、ヨーロッパ人達が日本については地理をはじめ全ゆる事を知つているのは、彼らが「天文地理ノ格物ヲ最トスル」為であり、利益を得る為に世界中に航海して「其ツイデニ天学ヲ校正」したからに他ならないとする。だから、日本人は、彼らの航海行為は学ぶ必要はないが、その天文地理は積極的に学ばねばならぬのであつて、蘭学が盛んになつて、居ながらにしてそれを学び得る事は「天下ノ幸甚シ」き事であると言うのである。しかし、若干触れた様に、「天文・地理・医術ニオイテハ古ヘヲ主張シ是ヲトルモノハ愚ナリト云ベシ」としながら、他方「人ノ徳行性質ノコトニ於テハ、古聖賢ヲ主トシテ是ヲ取ルベシ」という、ヨーロッパ科学とそれとは根本的に相い容れない儒学とを共有するという考えを厳然として固守するのである。[23]

彼の地理に関する記述は、主に「夢之代」巻二にみられるが、その世界知識は、白石の「采覧異言」や朽木昌綱の「泰西興地図説」（一七八八年）等々から学んだものとみられる。[24] ここで彼は、各大州に属する国名やその位置などを記し、メガラニカ大陸については「南ノ方ヲツクサズシテ、大地ナリトオモヒテツヒニ一州トス、然ルニ大州トスベキ地ニアラズ、ユエニ近世南アメリカニ附ス」として、それが存在しない事を明白に言つているが、全般的にこれと言う新しい知識はみられない。又、世界地図については司馬江漢や橋本宗吉の地図を参考にする事を読者に希望し、自分は非常に簡単な地図をのせているにすぎない。[25] その他、地理としては漂流民から聞いた安南の風俗、洪水と土木工

事等々の記述があるが、最も興味のあるのは、天文地理知識から生まれた彼のヨーロッパやわが国に対する考え方であろう。即ち、一七九二年の使節 Laxman の根室への来航、そして、一八〇四年の使節 Rezanov の長崎への来航などによつて、当時ロシアとの通商に関する交渉は、非常に重要な問題となつていたが、蟠桃はこのロシア人について、彼らが「天文地理ヲ第一トシテ」全ゆる事を知つているからこそ、世界の海を自由自在に航海し、他国に来ても何ら恐れる色も見せないのだとし、それは彼ら以外のヨーロッパ人においても同様であると言い、それに反してわが国の人々は、ヨーロッパ人よりもはるかに多くの文字を学ばねばならず、おまけに「仏学・詩歌」等々の「無用ノ稽古芸術」に毎日を費している為に、「忠孝仁義」は勿論「天文地理ソノ外ノ義理ニ通ジ」て「致知格物」に至るのは到底不可能であり、だから「我国ノ風俗今日ノアリサマヲ是トノミ心得テ、天変地妖外国ノ変事アレバ、何モ分ラズ驚怖スル」事しか出来ないのだと評しているのである。この日本人に対する批判は、当時のわが国の知識水準の低さを可成り的確に突いたものと言えるだろうが、彼はこれを打開する為には天文地理の学習が最も重要である事を強調したのであり、今日の我々地理学研究者から見れば、若干考えさせられるものがあるだろう。ところで、一般大衆の天文地理知識水準を高めようとするならば、やはり鎖国制度を廃止して諸外国との自由な文化交流を促進する事が最も必要であつたと考えられるが、蟠桃の考えは、それとは全く逆の方向に向いていくのである。即ち、彼は、ヨーロッパ諸国がその「奸智」によつてアメリカ大陸などの原住民を「アザムキテ或ハオビヤカシ」てその富を奪い、世界の陸地を次々と彼らの領土としているというヨーロッパ諸国の植民地獲得の状況に触れ、それは又、可成り的確な論ではあるだろうが、そこから「奸智」「博識」「知巧」「武」を具えるヨーロッパ諸国の侵略を受けていないのは、イギリスと日本だけであり、わが国には米穀や金銀などが充分にあるのだから、外国が通商を希望しても「免許ナキハ古今ノ良計ト云ベシ」という論理をひき出すのである。[26] 彼の師中井竹山が、蝦夷地の開発とそこでの官営通商の可能性を示唆し、もし外国が蝦夷地に攻めて来たら、何も戦争をしなくてもわが国が撤退すればいいのであつて、その結果

「蝦夷モシ外狄ニ奪ハレタラ又ソノ狄ト互市ヲ通シテヨクハ通シ、絶テヨクハ絶ツヘシ」といういわば弾力性のある意見を有していたのに比較すると、[27]蟠桃の論はより保守的である。彼はヨーロッパの天文地理学の優秀さを称讃し、わが国のそれがヨーロッパよりもはるかに遅れている事を嘆き、それ故にこそその知識摂取の重要なる事を益々痛感しながらも、他方では、その様な知識の発展を阻害し、一般大衆をこれらの知識から出来るだけ遠ざけておこうとする鎖国制度とその根底にある封建制度を是認するという矛盾した考えを露呈しているのである。この様な観点に立つ限り、長崎のオランダ人を通じて得られる天文地理知識も、いわば一部知識人だけのものとなり、結局はそれが支配階級によつて利用されるという傾向を益々強めていくのを阻止する事が困難になつたのである。

三

以上の様な蟠桃におけるいわば進歩性と保守性の両面は、「夢之代」巻三以下の歴史・経済・宗教等々についての彼の見解にも明瞭に現われている。即ち、地動説論などにおける実証的合理的研究尊重という考えは、日本の神話は「訛言」にすぎぬとし、古代についての研究は疑わしきは疑うという態度でなければならぬと言い、ヨーロッパの医学が非常に優れたものである事等々を主張している所にみられる。[28]しかし、最も注目すべきものは蟠桃研究者の最大眼目とされる彼の無鬼論であろう。尤も、これについては既に多くの人々による紹介がなされているので、ここでは簡単に記しておくに止める。[29]即ち、巻九「異端」において、聖徳太子から空海・法然・親鸞、そして当時の僧侶に至るまでが「釈迦ノ本心」を全く離れて、只自分の利益と栄達の為にその教えをとり入れ、その説が誤りである事を知りながら須弥山世界観を大衆に教え込んでいる等々の激烈な非難を浴せ、現在は大衆がキリスト教に惑かれない為に仏教が心要なのであつて、終局的にはそれも「消エズンバアルベカラズ」ものだときめつけるのである。これは、寺請制度などによつて幕府の保護を受けるという国教となり、それ故に安易な方向に流れて、僧侶の堕落と思想的停滞をみせていた仏教に対する儒学者としての批判であつて、彼の師竹山などの影響が大きいと言えるが、蟠桃は、特に極楽浄土とか仏像崇拝などという仏教の中の非合理的とみら

れた観念を徹底的に嫌忌しているのである。[30] それは、巻十・十一における無鬼論に一層明白に出てくる。無鬼論は言う迄もなく鬼即ち霊魂或いは妖怪・化物等々の存在を全く否定しようとする論であり、それは竹山にも若干見られたが、蟠桃はそれを更に発展させたのである。要するに彼は、この世界に存在するのは「人と万物」即ち人間とそれをとりまく自然だけであり、人間は動植物などと共に「生死熟枯ノ理」という一定の法則の下に、生成・発展・消滅するものであつて、死んでしまえば「智」も「神」も「血気」も何もかもなくなつてしまうのだと言い、「山川水火」にも別に神などはなく、結局、「神、仏、化物もなし、世の中に、奇妙不思議の事はなおなし」とするのである。だからこそ、わが国は「神国ナリトノシル」者は「愚昧ナ至リ」であるとか、神罰が下つたとか占いが的中したとかいうのは、全部偶然の一致にすぎないのだ等々、様々の例を引いて鬼神存在を強く否定するのである。彼のこの論には、孔子が「如在祭」と言つたのは「如」という字によつて、神に対する祭というものを否定したのだなどという理由づけをおこなつたりしているが、朱子をはじめ従来の有名な儒学者達が鬼神存在を肯定している事に対しては、それらの論は皆「狂ノ如」きものとしか考えられぬとするのであり、中でも新井白石は、他の事においては優れた見解を有していながら、鬼神の存在は認めているという事から、彼についての批判は激しいものがある。以上の様に蟠桃は、人間と自然を分離し、それらを物質として把握するという唯物論的思想をはつきりと示したのであり、その為には「主客彼我」の区別をおこなうという態度を持たねばならないと主張したのである。[31] そして、この様な考えに立つてないものに対しては、たとえ儒学であつても痛烈な批判を加えたのであるが、この理論形成の基盤に、ヨーロッパの天文地理から学んだ実証的合理的考察の態度というものを考える事が出来るだろう。

彼はこの様な見解を持つ一方、徳川家康の全国統一は「天命」による当然の行為であり、その支配が固まつて「ツヒニ芽出タキ封建ノ世」となつたが、この体制こそは日本に最適のものであつて「正ニ美ト云ベシ」と記し、貿易も「清ト紅毛トニ限ラセラレタルハ、古今ノ大快ナレバ減ズベカラズ又増ベカラズ」ものであつて、外国からの通商交

渉の為の使節は「追カヘスベシ、肯ハザレバ殺スベシ」等という非常に保守的な考えをのべているのである。勿論、そこには儒学は学者の学ぶべき「天道」であり、孔孟の教えこそ真の学問の道であるという彼の儒学観が根底を流れているのであり、更に、封建社会の中に安住していた彼の社会的地位が考えられるのである。[15] それは、自分は商人でありながら「農ヲススメ商ヲ退クベシ」「百姓ハ国ノ本」「百姓ナクバアルベカラズ、工商ハナクテモスムベシ」「百姓ニ工商ヲ禁ズ」る事が「国ヲ富スノ要法」等々と封建社会の経済的基礎たる農業に重点をおくべき事を主張する所にはつきり現われている。即ち、この主張は、同時に、米を主とする彼の商業の基盤を固める為の主張なのであり、それ故に自分達の利益に反する経済政策に対しては遠慮なく批判を加える。例えば、米の価格について論じた所で、凶作時に米が全国的に流通しないのは、その価格が低いからであつて、価格が高ければ「諸国ヨリ運送シテ餓死ノ憂ナシ」と言い、「今ノ政」を掌る者が、凶作時になると米の値下げをおこない、それを買占める商人を罰するのを非難し、常に利益を求めるのは商人として当然の行為であり、米買占商人がいるからこそ多くの人が餓死を免れる事が出来るのであつて、餓死の多いのは「商賈ノ罪」ではなく「政ノ罪」であると言う所などに最も明白に出ている。[16] 彼の経済論は、農業の重要性を前面に出す一方、商工の利益増大は士農の富裕に通ずるなどという理由によつて、巧みに自己の商業を弁護し、その重要性を強調し、更に、その利益に反する行為は批判するのであつて、封建社会における商人或いは市民階級知識人の一面をはつきりと見せている。尤もこの様な経済政策批判を、自己の商業のみでなく、他の商工業についても有していたかはいささか曖昧である。

四

以上の様に蟠桃は、ヨーロッパからの天文地理知識を学んで近代科学の精神を理解し、それを生み出したヨーロッパ人を高く評価すると共にわが国における科学知識水準の向上を意図して「夢之代」を書いたのであり、更に彼自身においては、全ゆる非合理的なものを否定していく唯物論的思想へとそれは成長したのである。しかし一方、その儒学的素養と社会的地位などから現状体制維持論を示すのであつて、折角、ヨーロッパ科学をもつと学ぶ必要がある事

を強調しながら、鎖国制度を承認し、開国に反対するという矛盾を平然として記しているのである。極言すれば、断絶すべき二つの思想が一人の人間の中に共存しているのであり、しかも社会的観念が保守的である為に、ヨーロッパからの天文地理知識によつて諸外国の社会について学び、そこからわが国の社会はどの様にあらねばならないかなどという社会改革の為の見通しは全く生まれなかつた。この様にみると、彼も又、白石以来の儒学とヨーロッパ科学との並立という考えから抜け出す事が出来なかつたと言えるだろうが、しかし、その唯物論的思想或いは歴史観や儒学観にさえみられる合理的精神[34]、更に経済論における政治批判等々を見るならば、どうやら彼が封建制度を認めたのは儒学的素養よりも商人という地位による所が大きく、もし彼らに対する権力統制が強化されたならば、封建制度を否定するという考えが増大する可能性が非常に多かつたのではないだろうか。彼の考え方は、表面上は支配者に従いながらもその下で出来るだけ自己の活動の自由を獲得して、その繁栄を推進しようと言うのであつて、それと体制との間の矛盾が頂点に達したならば、当然、全ゆる古い制度や観念に対する批判へと発展するものであつたと言えるだろう。しかし、彼は天文地理知識を基盤として、従来の古い観念を打破する方向を示しはしたが、未だそれは社会観には強く出ては来なかつた。それでは次に、蟠桃と比較する意味で、司馬江漢について考察してみたいと思う。

Ⅳ　司馬江漢の天文地理学とその思想

一

司馬江漢（一七三八―一八一八年）については、文化史や思想史上において蟠桃以上にしばしば取りあげられているが[35]、要するに彼は、平賀源内との交友によつて、その得意とする絵画の面から蘭学への関心を持つ様になつたのであり、前野良沢門下となつて大槻玄沢などの指導と協力を得て洋画技法の研究に努め、一七八三年、わが国最初の銅版画を完成したのである。更に彼は、銅版画や油絵の技術を外国人から直接学ぶ為に、一七八八年から翌年にかけて長崎を訪れたのであるが、その目的は達せられなかつたものの、そこでオランダ通詞達と知り合い、地動説などのヨーロッパの天文地理知識に初めて接したのである。これを契

機として、江戸に帰つてからの彼は、次々と天文地理書を著してその啓蒙に努め、得意の腕をふるつて銅版の世界地図などを出版したのである。彼の本業は画家であつたが、その絵画活動と共に天文地理における活動は特筆すべきものであつた。

二

江漢の天文地理書は、前記の如く長崎から帰つた後に出されたのであるが、その初期の書では、天動説を記すのみで地動説には殆んど触れていなかつた。しかし、「和蘭天説」（一七九六年）において、天動説と共に地動説を初めて紹介して、後者の優れている事を記す様になり、「和蘭通舶」（一八〇五年）になると地動説のみで天動説には全く触れなくなる。それは、本木良永の訳書を基とし、図によつて太陽系や惑星軌道等々を地動説の立場から説明した「刻白爾天文図解」（一八〇八年）において完成されたが、「天地理譚」（一八一六年）においてもそうなのであるが、彼の地動説の理論には、幾何学的な面が強くて、蟠桃にみられた引力などの力学的な面があまりない。この相違は、彼らが参考にした本木と志筑の訳書の時代と内容の差の現われであろう。[16] その他、江漢の自然現象に対する説明には、雪の結晶や虹や光の屈折等々可成り的確なものが多いが、自然に対する緻密な観察、特に虹や花の色などの色彩に対する観察などには、如何にも画家らしいものを感じさせる。只、彼の場合、そういう感覚的把握面が強く、自然現象の奥から何らかの法則を見つけ出そうとする面は、余り強く示されていない様に思われる。[17]

ところで彼は、地動説を支持する理由として、ヨーロッパ人は「其邦ノ開闢モ久ク亜細亜ノ諸国ヨリモ思深ク総敏」であり、実測を中心にして「格物窮理ヲ学デ天性空言虚談妄説ヲ不為」からだなどと記しているが、これは蟠桃における考えと全く同じものである。[18]

彼の地理上の業績として有名なのは、一七九二年の銅版地球図であるが、これには、それ迄は半分だけしか示されていなかつたオーストラリヤがニューギニアとつながつた形ではあるが、ほぼその全体が書かれ、島とされていたカリホルニアが半島となるなど当時においては最も正確な記載がみられる。彼は地図のみでなく前記のいくつかの書においては世界地理について記し、「和蘭通舶」などはヨー

ロッパ諸国についての説明は可成り詳しいものがある。これらの記述の中には、ブラジル人は「人死すれば其肉を食ふ」とか、スピッツベルゲンは小人国だとかのいささか現実離れのした記載がみられるが、これは当時のわが国の状態においては致し方ない事であろう。彼がこれらの天文地理書や地図を書いたのは、「従来我国の人多は輿地総界の事を知る者すくなし、冀は人々此図を見て万国の大なる事を知らしめんと欲す」という一般大衆への啓蒙にあつた事は言う迄もない。[19] 事実それは可成りの流行をみたといわれるが、その啓蒙運動と共に注目すべきものは、それらの書や随筆などに示される彼のヨーロッパやわが国に対する考え方である。即ち、彼は、ヨーロッパの国々では「諸民才能アル者」は皆、支配者が「其得ル所ヲ聴テ悉ク其好ム所ニ従テ之ヲ命」じ、その事業が一代で終らねば後継者がそれを続けるのだとか、病院や貧院等の社会保障施設が整つているとか、教育制度も優れている等々とその国情を羨望の眼でみつめ、わが国は「他邦ニ船ヲ不出故ニ国ヲ開キ人ヲ種ルノ術ヲ不知」「吾国の禁にして他邦に船を出ださず、故に他国の事を知る者鮮し」などとヨーロッパの進んだ制度を移入させない鎖国の弊害を指摘するのである。又、ロシアとの通商問題に関しては、「吾日本の米、他邦に且てなし、是を大舶に積、魯西亜を初諸邦に売バ、貨を得ベシ、彼国斉来る物薬種及奇器、吾国になきなり」「近年米穀安く武家に益なし、今に方りて魯西亜と交易を為さざるを思ふはなんぞ愚ならず」と、現在からみればやや見当違いの理由づけではあるけれども、実に明白に開国通商を主張し、それも長崎ではなく「蝦夷地において交易の場を開く時は、彼の地自ら開くべし」と北方開港をのべているのである。それ故、ロシア使節 Rezanov に対する幕府の回答は「甚失敬不遜」であり、外国人を「夷狄」として待遇するのは全く無礼な行為であるという批判や、松平定信なども博学ではあるが、鎖国に賛成である所を見ると「地理の事においてはいまだ究めざる事あるに近」いと言わざるを得ないという評価が出てくるのである。[20]

蟠桃と江漢は同じ様にヨーロッパの科学を称讃し、特に地動説を含む天文地理の重要性を強調したが、そこから前者が鎖国是認の考えをひき出したのに対し、後者が逆の鎖国廃止の考えを持つに至つたのは興味のある事である。恐

らく江漢は、源内や玄沢等々の蘭学者達との交友によつて、ヨーロッパ科学の優秀さを痛切に認識し、更に、蟠桃などの様な封建体制との密接な関連は殆んどなかつた為に、蘭学への強い欲求が開国賛成という意見に容易に発展しえたのであろう。しかし、ここではもう少し彼について考察する必要があるだろう。

三

江漢は、その絵画に対する見解として、洋画は「濃淡を以て陰陽凸凹遠近深浅をなす」所に写実の為の真の技法を持つており、それにくらべると日本の絵画は「画と云ものには非ず」などとのべているが、これは地動説に対する認識と共通する考え方だろう。[11] 更に、「支那我国に鬼神を論ずる者あり、誠に愚論と云ふべし」という鬼神否定、聖徳太子は「天下に益なき道を弘めたる祖」などという仏教批判等々、非合理的なものを拒否しようとする考えは蟠桃のそれと同様である。又、彼の論の中で特色のあるのは火気根源論ともいうべきものであるが、これは、万物の根源は大気中の火気であるとし、例えば、人間が生きているのは食物によつて体内の火が燃えつづけているからであり、人が死ねばその火は天即ち太陽に帰るのだという論である。彼はこれによつて、人間の死後には霊魂などは残らないのだという事を説明しようとしたのであり、これも又、蟠桃にくらべるとややその論理が漠然としてはいるが、一つの唯物論的思考を示すものと言えるし、又、太陽中心の地動説との関連もうかがえるであろう。[12]

しかし、宇宙への知識を深め、人間や自然を観察してその根源を考察し、更に宇宙と人間を比較して考える事から、晩年の彼には可成り虚無的な思想が出てくるのである。即ち、地球は宇宙の中の「一粟」であり、人間はその「一粟」の中に生滅を繰り返している「微塵」よりも小さい存在であり、その根源から考えると、衣食住の為に求める様々の物資は全て泥や土や塵にすぎないのではないかと言うのであり、更に人間は万物の根源たる「気」の満ちた「虚空」――彼によれば「実」なるもの――から生まれるが、生まれて「質」となるとそれは土や泥と同じものであるから、人の存在は「虚」となるとし、死ぬと「気」即ち「実」の世界に還元するから、結局、人間の死こそ「実」であり、生は「虚」であるという結論を出すのである。正にこの結論

は、宇宙の永遠性と人間の生命の短さを結びつけ、それに何らかの論理を与えようとして作り上げたものであろうが、そこには虚無的な臭いが非常に強く存在している事は否定出来ないであろう。[13]

彼は又、「和蘭天説」などにおいて可成り humanistic な人間観を示し、万物は塵にすぎないという考えからも「上天子将軍より、下士農工商非人乞食に至るまで皆以て人間なり」という一種の人間平等観を生み出している。尤もこれは、上は上で、下は上を望んで利欲を求めて右往左往している点で同じ人間なのだという宗教的観点からのものであつて社会的平等を主張しているのではない。しかし、農民などが多分に人間として扱われない傾向の強かつた当時としては、やはり注目しておかねばならぬ考えであろう。

その他に、若い時には儒学を学び、金や名声は得られる時は出来るだけ得る様にし、只、過度の事をせずに中庸を保つ事が大事であつて、前記の様な虚無的思想を持つてはいけないとも言つているが、これは全国的にその名を知られ、諸大名や上流階級の人々と「同僚」の様な態度で会う事の出来た彼の人生から生み出した一つの処世訓であり、同時に又、当時の町人階級の生き方を代表しているものとも言えるであろう。[14]

四

司馬江漢は、洋画と天文地理における活動において可成りの名声を得ると共に、それらの知識から、鎖国の弊害、「天下に才ある者といへど、農夫商工の家に生るる時は卑賤なりとして之を用ひず、諸侯貴家に生るる者は才なし雖も之を用ふ」という封建社会における身分制度への批判、わが国は「人知」も浅く「人工」も遅れていて、「漸く地転の説を知る者僅に二三輩」という知識水準の低さ等々のわが国の社会における矛盾に次第に眼を向ける様になつたのである。けれども、それはより一層の発展をみせず、逆に「吾国の人は万物を窮理する事を好まず、浅慮短智なり、予此日本に居て吾国の人に差ふは甚しき謬なり」という他人に対する不満・皮肉・嘲笑へと向い、遂には諦めという所に行き着いてしまつたと言えるだろう。[15]

この様に彼の思想が大きな発展をみせなかつたのは、彼の認識が感覚的又は表面的、悪く言えば pedantic な面が強く、対象を底の底まで探求するという面が欠けていた事

が大きな原因ではなかつたろうか。今日から考えるならば、ヨーロッパ科学の移入が非常に限られていた当時にあつて、対象を究明する為の研究態度を身につけようとするならば、儒学におけるいわゆる「致知格物」精神が少しは役立つたのではないだろうか。蟠桃が無鬼論を展開して儒学への批判にさえも触れ得たのは、ヨーロッパ科学からの合理的精神とこれとを充分に活用したからであり、江漢にはその様な考え方がいささか欠けていたと考えられないだろうか。又、彼の生活が多分に上流階級に支えられる所が大きかつた事、更に、江戸の蘭学者の中での武士・藩医等々の階層の人々と江漢などの町人階層の人々との間の対立と前者の後者に対する「上わすべりの片言知り」などという罵倒及び絶対的優位などは、[10] 江漢が社会批判をする一因ともなつたであろうが、結局は、この様な蘭学者達に対する失望感から非常な孤立感へと彼を落し入れてしまつたのではないだろうかという事等々も、彼の思想が発展しなかつた原因としてあげる事が出来るだろう。

V　本多利明の開国通商論

蘭学興隆以後に移入されたヨーロッパの天文地理知識は、わが国の知識人の眼を近代科学とヨーロッパ諸国の国情に向けさせ、そこから蟠桃における鎖国維持論と江漢における鎖国廃止論などの社会思想を生み出した。ところでこの二つの内、後者が封建体制を崩壊に導き、近代社会形成への進路を決定づける一要素となり得た点で注目すべき事は言う迄もない。只、当時の開国論の多くは、ロシヤとの北方問題に関連して富国の為の通商や蝦夷地開発などを中心とするもので、文化交流なども含む全面的開国論ではなかつたとも考えられるが、しかし、その歴史的意義はいささかも減ずるものではないだろう。

さて、この様な開国論の先駆としては、工藤平助が「赤蝦夷風説考」（一七八三年）において、北方の防備と密貿易の取締りの為の蝦夷地開発を説き、更に蝦夷地での金銀銅山の開発とそれを基礎にしてのロシヤとの通商、そしてその利潤による蝦夷地開発事業の促進を主張したのがあげられるだろう。彼の「蝦夷の一国を伏従せしめば、金銀銅に限らず一切の産物皆我国の用を助くべし」「国の力を厚くするには、とかく外国の宝を我国に入るを第一といふべし」

という考えは、田沼意次を動かして幕府役人と最上徳内による蝦夷地調査をおこなわしめたのである。[17] それは結局、意次の失脚によつて中止されたけれども、平助の考えは、蟠桃や江漢と同時代の人である有名な本多利明に受けつがれた。周知の如く利明は、「西域物語」などによつて繰り返し外国との貿易・蝦夷地開発の必要性を説き、その為には天文地理航海術を充分に修得すべき事を主張したのである。その内の貿易拡大の理由としては、日本の金銀銅の大半がオランダやわが国の商人の手に渡り、その為に、「永禄の長者たる武家」は皆貧乏となり、その上、士工商の人口増加は農民の負担を益々重くさせ、しかも、わが国の田畑の面積、米の収穫量、年貢の量には限度があるなどから考えてみると、その打開策としては、他国の力を容れる事即ち官営による通商しかなく、これをおこなえば国内産業も繁栄するだろうと言うのである。更に、それには「海洋渉渡」の方法、その基本たる天文・地理・航海術、又、その基礎である数学・測量を充分に修得せねばならないとする。この天文地理渡海を第一としなければならぬという彼の考えは、ヨーロッパ諸国がそれらを「天職」としてその繁栄を達成したという認識と「神儒仏」の三道からは、今迄に国家の為になる程の人間は全く出ていないという批判から生まれたのであり、「国土の貧富も剛弱も皆制度教示にありて、土地の善悪に非ず」と言い切つている。彼の蝦夷開発論は、平助のそれと殆んど同じものであるが、彼は更に、オーストラリアの例を引いて罪人や浮浪者を蝦夷地へ移民させたらよいとか、蝦夷には良材があり、これで船を建造して国内或いは外国貿易に大いに利用し得る事などもつけ加えている。この様な彼の通商・開発論の根底には、前記の如く、商人だけが繁栄して、「日本国中の産物の主たる武家」が彼らに経済的に支配され、苦しい生活をしているのは「苦々しき次第」だという考えが横たわつているのであるが、同時に、天明大飢饉の際における農民の悲惨な状況を見聞し、彼らが、その貧窮の故に「間引」や逃亡や一揆などをおこなわねばならぬ事に対する一種の同情感も若干うかがえるのであり、それは「借たる覚なき租税は虐取て餓死に臨といへども見殺にする」様な農民政策を批判している所などに現われている。[18]

利明の開国通商論や天文地理の重要性についての主張は、

江漢と同様に可成り強いものがあるが、江漢にみられた様な封建社会への批判はあまり強くない。それは、彼の通商論があく迄も幕府の主導権の下におけるそれを主張している事などからみられる様に、当時の国内商業経済の発展や農民一揆の頻発などの国内状勢を打開する為の一つの政策を支配者に示唆するという意識を彼が強く有していたのではないかと考えられる所にも、その一因があるのではないかと考えられる。

Ⅵ　権力による蘭学統制と天文地理学

以上の様な開国通商論は、たとえ官営通商を主張するものではあつても、幕府が鎖国政策を厳然として固守している限りは、それを公然と唱える事は甚だ危険な事であり、幕府としてもこれらの人々への監視を常に怠らなかつたであろう。

蘭学が将軍吉宗によつてその興隆の端緒を開かれた事自体が、既に支配者階級の為の学問としての性格を強める事とはなつたが、しかし、いわゆる知識人から一般大衆への間にそれが拡がつていくにつれて、そこから次第に反権力的性格が生まれる様になるのは、当然、予想されるところである。その為に、これを完全に支配者の手に握ろうとする傾向が、蘭学は幕府の利益の為に奉仕すべきものと考える松平定信の登場によつて次第に強くなつてきた事は周知の通りであろう。[19] 彼が一七八六年、「海国兵談」において「江戸の日本橋より唐・阿蘭陀迄も境なしの水路」だから、長崎のみでなく江戸を中心とした全国的海防が必要であるという論をはじめとする軍備論を十四巻にわたつて展開した林子平を、[20] 政治批判の理由で処罰した事は余りにも有名であるが、子平が江戸の蘭学者仲間の一人であつた事は、その後の蘭学の方向に可成りの影響を与えたであろう。定信の老中辞任後も、一七九五年の天文方設置と高橋至時・間重富の登用、ロシア問題に伴う近藤重蔵や間宮林蔵などの北地探検、伊能忠敬の測量事業、一八一一年の蕃書翻訳局の設置と大槻玄沢をはじめとする多数の蘭学者の登用等々、支配権力の下における蘭学事業が次々とおこなわれ、それは忠敬の優れた業績などを生み出したのではあるが、この様な状況においては、世界地理書も単なる知識の羅列に終つて、そこから何らかの新しい思想を生み出す事は困

難になつた。この蘭学の官学化即ち天文地理学の官学化と多くの蘭学者がその中に組み入れられる傾向が強化されていく時代に、いわばその外側において天文地理知識を摂取し、夫々多くの限界はあつたけれども、いくつかの新しい思想への発展を示していた蟠桃や江漢の存在は、注目すべきものであつたと言えるだろう。

やがて江漢没後十年、蟠桃没後七年目に当る一八二八年Siebold事件が起り、高橋景保以下多くの蘭学者やオランダ通詞達が逮捕される事態となつた。景保は、当時の最高水準を行く世界地図を作り、伊能忠敬の事業を援助するなどの業績を残した優れた蘭学者・天文地理学者であつたが、他方、幕府の高級官吏である彼は、外国船打払令などの鎖国政策を強く支持していたのである。[31] しかし、この様な彼でさえも、その学問的欲求から外国人との交友において些細な事で法律を犯した事に対して、獄死したその塩漬けの死体に死刑の判決を下されるという酬いを受けた事から考えるならば、当時の支配者の蘭学統制の厳しさの他に、蘭学者がこれにより大きな恐怖感を抱き、次第に自らの殻に閉じ込もる傾向を見せたであろう事や支配者が一般大衆の間に蘭学者或いは蘭学への不信感を広く植えつけるようになつたであろう事が推測出来る。

それは、これから十一年後の一八三九年に起つたいわゆる蛮社の獄事件によつて決定的なものとなる。この事件によつて捕えられた人々の中心的存在であつた渡辺崋山は、「慎機論」などの著述において、ヨーロッパ諸国は社会・教育等々全ゆる面の制度が整い、それによつて経済力・軍事力を発展させている事を説き、その様な彼らが日本近海に出没している時に当つて、未だに昔からの「高明空虚の学」を固守している様な状態と「大臣」「権臣」「儒臣」などは全て頼むに足りない有様である事を批判しているのは注目に値する。しかし、この様な彼の世界地理知識は、これらの国に具えて海防を強化すべきであるという論を生み出したけれども、開国に関しては、台風避難・飲料水や燃料の補給は人道的見地から認めるが、通商については「御国政御変遷なきこと」として拒否する他ないだろうという考えに止まつている。彼の同志である高野長英も、その「夢物語」において、外国船打払令は、日本は「暴国」であるという評価を世界中に与え、「国家の御武威」にも

傷がつくであろうという批判などはおこなつているが、通商開国の件については「国初より御規定の所厳しく仰わたされ断然として御制禁の旨仰つけられ」るべきだとしている。彼らは、江漢や利明などにくらべれば非常に穏健な意見を示したのではあるが、結局、次々と逮捕され、事件発端時における小関三英、蟄居中の崋山、脱獄後三年にして発見された長英が全て自殺するという結果に終つたのであり、これには、鳥居羅蔵などの保守派の策動が大きく影響した事も忘れてはならないだろう。崋山達も彼らの陰謀に憤慨し、自分達の無罪を主張したのであるが、それはさて措いて、この事件で重要な事は、「慎機論」などが未完の書であつて、いわば著者の机の中に仕舞われてあつたものにもかかわらず、家宅捜索によつて没収され、しかも罪状の最大の決め手となつた事であり、この様な状態では、世界地理を学んでそこからわが国に対する批判を生み出し、それを内密に著述する事さえも非常に危険になつてくる。又、長英が「烏の鳴音」において記している様に、事件発生の前から「近頃異端の蘭学盛に行はれ、動もすれば外国を尊び、本邦を卑んじ、朝廷を誹謗するもの多し」などという噂が一般に流されていたとみられ、事件発生によつて、それが「蘭学者は残らず召されん、今にも囚はれなん」という噂に発展し、大衆の間に蘭学者への不信感を植えつける様になつたとみられる。長英が、自分も崋山も、西洋学を好み地理書を研究した事が「或人の嫌忌を受る所にして、此災厄の起原する所」と考えられると言つている様に、保守派の策動は、幕府権力の外における蘭学研究或いは世界地理研究活動を弾圧し、その後の発展を封じ去る事に成功したと言えるだろう。[53]

この事件以後、蘭学に対する幕府の統制は一層強化され、天文地理学も軍事科学と共に幕府及び諸藩勢力強化の為の科学としての性格を益々大きく具える様になるのである。

要するに、ヨーロッパの天文地理知識から近代社会に通ずる様々の思想が、江戸時代において最も盛んに形成されたのは、蟠桃・江漢・利明など――それが全て公然と発表されたという訳ではないけれども――の活躍した時代であつた。しかし、それは彼らの時代以後は急速な衰退をみせ、その発展は明治維新直前の頃を待たねばならなかつたのである。[54]

これには、前記の如き権力による強力な統制と共に、多くの蘭学者が蘭学と儒学とを共有する思想を持つていた事も考えねばならないだろう。江戸時代の儒学の中心であつた朱子学は、社会的矛盾の増大と共に次第にその行き詰りをみせてはいたが、「物理」即ち自然法則を解明し、同時にそれを人間社会に適用して「道理」即ち道徳的規範を定め、「道理」が「物理」に優越するというその基本観念[51]は、封建社会においては容易に崩壊するものではなかつた。この様な「道理」優越観念は、ヨーロッパからの合理的科学とは殆んど相い容れないものであるが、「物理」解明の為に事物を徹底的に究明するという「致知格物」精神は、合理的科学と若干つながるものがあつたのではなかろうか。この様に考えると、新井白石が「形器」上におけるヨーロッパ科学の優秀性を認めたのは「物理」の面で若干それを取り入れる契機となり、以後、蘭学者は、「道理」では儒学をとるが「物理」では蘭学をとろうとする傾向を持ち、いわば物理＝道理、物理＜道理という儒学の公式の内の後者を固守したとも考えうるだろう。ところで、山片蟠桃は、自然法則把握いわば「物理」面では唯物論的思想にまで達して古い観念を打破したが、そこから古い「道理」打破にまでは発展せず、表面上はその間に大きな断層がある。しかし、彼の考えは、儒学観念の公式を破壊する数歩前にまで来ていたのではないだろうか。又、司馬江漢は、「物理」面では蟠桃が示したものには及ばないが、「道理」面においては、その古い観念を打破しはじめていたのであり、天文地理知識は、彼らに実証的合理的な認識の重要性を示し、それらの思想を発展せしめた事において大きな意味を持つていたと考える事が出来る。しかし、結局は彼らも儒学と蘭学並立思想から完全に抜け出る事が出来なかつたのであり、ここに、ヨーロッパ科学伝来以来のその観念が非常に根強いものであつたのを見る事が出来るのである。

むすび

以上、江戸時代後半の天文地理学が、山片蟠桃や司馬江漢において、夫々大きな限界を残してはいるけれども、とに角新しい思想形成の方向を生み出し、更にそれに関連する多くの問題を含有していた事について概観——正に言葉通りのものとなつてしまつたが——したのであるが、この

様な近世日本地理学は、又、現代の地理学に対しても多くの問題を投げかけている様に思われる。

例えば、天文地理知識を基礎にして唯物論的思想や封建社会への批判が形成された事、特に地名や産物の羅列にすぎなかつた世界地理知識が、当時の人々の間に国際的視野を開かせ、日本の社会の様々の面に対する意見を生み出し得た事は、現代地理学の地誌の問題に関連してくるものがあるだろう。今日の地誌は羅列的記述の状態から殆んど脱皮していると言えるだろうが、尚そこには多くの重要な問題が存在している事は度々指摘されている所である。しかし何れにせよ、地理学が他の科学と同様に人類社会の幸福と発展に寄与すべきものであるとするならば、地理学諸分野の成果の凝集たる地誌が、現代社会に内在する様々の問題に真剣に取り組んで、世界や日本の現実をはつきりと人々の眼前に展開せしめ、社会の現状とその将来を考察していく上の大きな拠り所となる事が尚一層必要とされてくるのではないだろうか。[65]

更に近世日本地理学が投げかけているより根本的な問題として、いわば地理学研究者における科学研究の態度という問題がある。例えば、一方で進んだ制度を持つ諸外国への知識を深めながら、他方では封建制度を積極的に支持するという考えと同様な思想を持つ限りは、科学としての地理学の目的を充分に果す事は到底不可能となるのは言う迄もないであろう。ところで、明治以後のわが国の地理学の歴史に関しては筆者は未だ甚だ不勉強ではあるが、最初に記した様に、それは欧米諸国の地理学を移入する事によつて近代科学としての一応の発展を示したと言えるが、やがてその「移入する」という状態は、ナチスドイツにおいて完成した地政学理論の移入と日本ファシズムの下におけるその隆盛を招き、更に第二次大戦直後におけるわが国地理学の崩壊という事態を結果したと言えるだろう。ここにおいてわが国の地理学は多くの貴重な経験を得たのであるが、その中から、従来のわが国における諸外国地理学の移入が、それに対する徹底的な検討をおこなう事なしに、多分に機械的にその方法論を移入するという面が強かつた為に、結局は「地理学の革新」という名の下に凡そ科学本来の目的とは全く矛盾した理論を展開してしまつたという事、即ち、科学研究者としての最も根本的な思想の問題が等閑にされ

ていたという事を痛切に感じ取る事が出来るのである。[36]

又、近世日本地理学は、以上の問題に密接に関連する支配権力と地理学との関係などについても多くの問題を含んでいるが、要するに、蟠桃・江漢・利明等々が主張した地理学の重要性は、現代においても脈々と生き続けていると言えるのであり、地理学が社会の発展の上にも或いはその後退の時期においても大きな影響力を持つているという事を改めて認識させてくれているのではないだろうか。

附記　この小文は、一九五九年十二月に完成した論文の要約に本多利明などの論や権力の統制等々の問題をつけ加えたのであるが、紙数の関係もあつて、蟠桃や江漢をはじめとする彼らの書からの引用を極度に切りつめてしまい、その結果、甚だ不親切ともいうべきものになつてしまつた事をお詫びする次第である。

尚、前論文及びこの小文作成に際して、織田先生はじめ諸先生方、先輩・同僚の方々或いは参考文献から多くの有益な御教示を致いた事に対し深く感謝する次第である。しかし、筆者の浅学の為に、それらを充分に生かし切れず、誤謬と偏見の多いものになつたであろう事を恐れるものであり、今後共、蟠桃や江漢等々に対する分析の不充分な点をはじめ有益な御教示・御叱正を賜わらん事を読者諸兄にお願いする次第である。（一九六一年三月）

① 東京科学博物館編『江戸時代の科学』一―二四、五一―八六、一四七―一八〇頁、昭九、岩根保重「近世日本地理学史序説」（『地理論叢』第八叢、二八五―三二〇頁）、栗田元次「江戸時代世界地図概論」（『史学研究』一〇―一）、藤田元春『日本地理学史』第一・六―八章、昭一七、山口貞雄『輓近地理学発達史』一六―五六頁、昭一八、鮎沢新太郎『近世日本の世界地理学』昭二三、同『鎖国時代日本人の海外知識』（世界地理の部）三―三六七頁、野間三郎・松田信・海野一隆『地理学の歴史と方法』一―六九頁、昭三四。

② 永田広志『日本封建制イデオロギー』昭二二（昭一三）、同『日本哲学思想史』昭二三、佐藤昌介「江戸時代の科学と思想」（『今日の哲学』Ⅲ〔科学論〕一一―四三頁）一九六〇、後掲註一〇・一六・三六の諸文献。

③ 海老沢有道『南蛮学統の研究』昭三三、同『南蛮文化』昭三三。

④ 天動地球論・Aristoteles の理論――アーレニウス・寺田寅彦訳『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』（岩波文庫本）、特に八九―一〇五頁、シュヴェーグラー・谷川徹三・松村一人共訳『西洋哲学史』上（岩波文庫本）、一七一―二一五頁、島村福太郎「天文学史」（『科学史大系』Ⅶ）、七五―一四六頁、一九五三、藪内清『天文学史』一九―三五頁、昭三〇、織田武雄『古代地理学史の研究』一八七―二二五、三二三―三二六頁、昭三四、近藤洋逸・藤原佳一郎『科学思想史』特に二八―四九頁、一九五九。　神儒仏の理論――梅沢伊勢三『古事記・日本書紀』

三九―一〇一頁、一九五七、藪内清『支那の天文学』昭一八、釈円通『仏国暦象編』一八一〇年。　天動地球論或いは後の地動地球論への反論としては、林羅山（『日本思想闘争史料』第十巻）や釈円通（前掲書）などが有名な事は言う迄もない。

⑤ 鮎沢新太郎『日本文化史上に於ける利瑪竇の世界地図』昭一六、同『地理学史の研究』三六―八六頁、昭二九、前掲註一の諸文献。

⑥ 伊東多三郎「禁書の研究」（『歴史地理』六八―四・五）海老沢有道「禁書令に関する諸問題」（『歴史教育』四―一一・一二）、杉本勲「禁書令下の西洋文化」（『日本歴史』五九）前掲註三、後掲註一〇の諸文献。

⑦ 向井玄松「乾坤弁説」（『文明源流叢書』第二冊、一―一〇〇頁）。天動地球論―元巻第八―九・一一・一三、利巻天部、儒学理論―元巻第一―三・六及び巻初の「四国学例」など。

⑧ 西川如見「日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考」（岩波文庫本）、内田秀雄「西川如見と其の地理学」（『史林』二四―一）、鮎沢新太郎『鎖国時代の世界地理学』一―二三頁、昭一八、同『西川如見の世界地理研究』昭一九。

⑨ 新井白石「西洋紀聞」「采覧異言」（『新井白石全集』第四、七四一―七九七、八一三―八五五頁）、吉野作造『新井白石とヨワンシローテ』三―六一頁、大一三、羽仁五郎『白石・諭吉』七―二二七頁、昭一二、鮎沢新太郎『新井白石の世界地理研究』一―七五頁、昭一八、宮崎道生『新井白石の研究』昭三三、前掲註一の諸文献。

⑩ 杉田玄白『蘭学事始』（岩波文庫本）、大槻如電『新選洋学年表』昭二、（尚、「新選洋学年表についてⅠ・Ⅱ」（『科学史研究』一八―一九、一九五一参照）、高橋磌一『洋学論』昭一四、沼田次郎『幕末洋学史』昭二六、同『洋学伝来の歴史』昭三五、村井益雄「洋学論」（『新日本史講座』）昭二八、伊東多三郎「洋学の一考察」（『社会経済史研究』七―三）、板沢武雄『日本とオランダ』昭三〇、同『日蘭交渉史の研究』昭三四。

⑪ 杉本勲「天動説から地動説へ」（『日本歴史』一四）、阿部真琴「江戸時代に於ける地球円体地動学説」（『唯物論研究』二）、板沢武雄「近世における地動説の展開とその反動」（『史学雑誌』五二―一）。

⑫ 桑木彧雄「本木仁太夫良永の事蹟」（『科学知識』六―十一・十二）、矢島祐利「本邦に於ける初期の物理学的研究」（『科学史研究』二・四・五）、三枝博音編『日本哲学全書』第八巻。尚、「太陽第理了解説」は「星術本原太陽第理新制了解天地二球用記」の略。尚、コペルニクス・矢島祐利訳『天体の回転について』（岩波文庫本）、ガリレオ・ガリレイ・青木靖三訳『天文対話』上（岩波文庫本）など参照。又、すでに向井玄松の前掲書の原本は、地動説のある事を記すけれども、その理論は認めていない。それ故に、玄松も弁説においては、専ら天動説に対する批判しか記していない。

⑬ 例えば、三浦梅園の「帰山録」などにそれがうかがえる。（『梅園全集』、『三浦梅園集』〔岩波文庫本〕）。

⑭ 志筑忠雄「暦象新書」（『文明源流叢書』第二、一〇一―二五五

頁)、三枝博音編「日本哲学思想全書」第八巻、六七―三二一頁。尚、この書は、Oxford 大学の J. Keil の書いた「Principia」(「Philosophiae Naturalis Principia Mathematica」)についての註釈書を、更にオランダ人 Johan Lulofs が一七四一年にオランダ語訳したものをその原本とする。

⑮ 儒学との折衷――上編巻之上、附録「天体論」、中編巻之上「元気屈伸」「重力」、同巻之下附録「不測」など。尚、下編巻之下附録「混沌分判図説」は Kant, Laplace の星雲説に比せられるものといわれる。

⑯ 内藤湖南『山片蟠桃について』大一〇、土屋喬雄解題「山片蟠桃集」(『近世社会経済学説大系』第一三冊、昭一一)、亀田次郎『山片蟠桃』昭一八、林基「山片蟠桃についての覚書」(『文学』昭二三―三)、有坂隆道・末中哲夫「山片蟠桃の研究」(『ヒストリア』一―四、六―七、九)、有坂隆道・小山仁示「山片蟠桃の人と思想」(『日本人物史大系』第四巻、一五三―一七六頁)昭三四、宮本又次『大阪商人』一九七―二三二頁、昭三三。

⑰ 前掲註一六の諸文献、宮本又次『大阪』一六〇―一七一頁、昭三二。尚、引用文に示す如く、海保青陵(一七五五―一八一七)の著書(『日本経済叢書』巻十八の内、「升小談」「稽古談」巻之二)に蟠桃についての記述がみられる。

⑱ 藤沢章次郎「大阪の儒学」(『徳川時代の儒学』、七八九―八一三頁)、昭一四、大阪大学編『懐徳堂の過去と現在』昭二八、前掲註一六の諸文献。

⑲ 渡辺敏夫『間重富とその一家』昭一八、前掲註一六の諸文献。

⑳ この小文では、滝本誠一『日本経済叢書』巻二十五所収の「夢之代」を主とし京都大学附属図書館所蔵の写本も参照した。

㉑ 神仏儒説否定――天文第一、二三―二四、地動説・志筑からの引用――同二七―三一など。

㉒ 暦――天文第一、四・一〇、吉凶否定同一三、潮汐――同一六、他の太陽系の存在――同三四―三五、陰陽五行論否定――経論第七、八・雑書第八、三・七など。

㉓ 天文第一、一三・二五・三二―三三など。

㉔ 「夢之代」巻初の引用書目中には、その他に、「三国通覧」「紅毛雑話」等々の書名がみられる。尚、これについては、鮎沢新太郎『新井白石の世界地理研究』一五九―一七七頁、同『鎖国時代日本人の海外知識』を参照。

㉕ 地理第二、一六・一九―二一など。尚、一六には「近キ頃東都ノ司馬江漢ト云人銅板ノ図ヲ出ス、又浪華曾谷氏ナル人図ヲ造ル、故ニコレニ譲リテココニ略ス」とあるが、「浪華曾谷氏」が橋本宗吉の「喝蘭新訳地球全図」の発行者の一人と考えられる事については、前掲註二四の鮎沢氏の文献参照。

㉖ ヨーロッパ讃美――地理第二、一九、ヨーロッパ諸国の植民地獲得・鎖国支持――同二五など。

㉗ 中井竹山「草茅危言」巻之二、蝦夷之事(『日本経済叢書』巻一六)

㉘ 神話・古代史――神代第三、一―八・一三・一六、医学――雑論第十二、七・二一―二二・二四など。

㉙ 三枝博音編『日本の唯物論者』一四二―一五七頁、昭三一、

永田前掲書、前掲註一六の諸文献。

㉚ 異端第九全編（特に一・三―五・二八等々）、中井竹山「草茅危言」巻之四、戸口之事・仏法之事・寺院之事、巻之五、寺町僧侶之事。尚、懐徳堂での蟠桃の先輩ともいうべき富永仲基（一七一五―一七四六）の仏教批判（「出定後語」）も注目されるものである（註二九三枝前掲書六九―七九頁）。

㉛ 無鬼上第十・同下第十一全編、「夢之代」巻末の「地獄なし極楽もなし我もなし、ただ有物は人と万物」「神仏……なをなし」の歌、三枝博音編『日本哲学思想全書』、第五巻、一五―一三三頁、昭三一、中井竹山「草茅危言」巻之四、祈禱之事。尚、人間の「神」は神経を意味するもの。

㉜ 封建制度支持――歴代第四、五、制度第五、二、鎖国支持――歴代第四、二一―二二、儒学観――経論第七、一五・三三、雑書第八、二二など。

㉝ 農業中心――制度第五、一九、節約など支配者のとるべき経済政策――経済第六、一・一四・一九・二一、買米支持――同四・二三、高米価――同二二など。

㉞ 例えば、雑書第八などには、従来からある歴史書や儒学書を読む際は、その内容の真偽をよく考えながら読むべきだなどと言つている。

㉟ 村岡典嗣「市井の哲人司馬江漢」（『続日本思想史研究』、二一二―二五一頁）、昭一四、中井宗太郎『司馬江漢』昭一七、海老沢有道『南蛮学統の研究』三七六―四〇六頁、永田前掲書、前掲註一〇の諸文献。尚、江漢自身が書いた自叙伝として「春波楼筆記」（一八一一年）（『文明源流叢書』第一冊、三九五―四六六頁）の中にある「江漢後悔記」があげられる。

㊱ 「興地略説」（一七九二年）では天動説のみ、「地球全図略説」（一七九三年）では地動説が存在している事は記しているが、識者以外は「虚妄の説」として疑うべきだとしている。「刻白爾天文図解」の序に、本木良永の訳書を基とし、江漢自身も原書に接して完成したとのべている。

㊲ 「和蘭天説」「天地理譚」などに自然現象の説明が多く、「刻白爾天文図解」には寒暖計や気圧計の説明もみられる。

㊳ 「興地略説」、「地球全図略説」、「和蘭天説」凡例、同跋、「刻白爾天文図解」凡例など全ての書にみられる。

㊴ 江漢の地理的業績――鈷沢新太郎『大日本海』一一八―一二七頁、昭一八、同『鎖国時代の世界地理学』八一―八九頁、同『地理学史の研究』二五二―二八一頁、前掲註一の諸文献。

㊵ ヨーロッパ諸国――「和蘭通舶」巻之一、五大州総説など、日本――「春波楼筆記」。

㊶ 「西洋画談」（一七九九年）、「春波楼筆記」。

㊷ 「春波楼筆記」、火気根源論――「和蘭天説」「天地理譚」にも詳しいものがある。

㊸ 「春波楼筆記」。

㊹ 例えば、外国では人間を人間として使い、日本の様に牛馬扱いはしないなどと言う『和蘭天説』、宗教的平等観――「春波楼筆記」。

㊺ 「春波楼筆記」、「司馬無言辞世の語」、村岡典嗣「司馬江漢の

独笑妄言」（『続日本精神史研究』、二五二―二五九頁）。

⑯ 佐藤昌介「洋学の権力隷属化に関する一考察」（『日本歴史』一〇五―一〇六）、同前掲書。

⑰ 工藤平助「赤蝦夷風説考」（大友喜作編『北門叢書』第一冊、二一一―二四五頁、解説、一五―二〇八頁、昭一八）。

⑱ 本多利明「西域物語」「経世秘策」「経済放言」（本庄栄次郎解題『本多利明集』近世社会経済学説大系）の内、特に「西域物語」（一七九八年）（同右一二一―二〇四頁）による。本多利明「赤夷動静」（蝦夷土地開発愚存之大概）（一七九一年）、内田秀雄「地理学者としての本多利明」（『地理論叢』第七叢）、鮎沢新太郎『地理学史の研究』二八二―三〇一頁。

⑲ 前掲註一〇・四六の諸文献。

⑳ 林子平「海国兵談」（『大日本思想全集』第九巻、昭八）。

㉑ 鮎沢新太郎『鎖国時代の世界地理学』一三一―一七九頁、前掲註一の諸文献。景保の蘭学に対する造詣の深さを物語るものとして、取調べの際にオランダ語を交えて役人を困らせ、或いは出延毎に「オランダ人又まいりましたぞ」と叫んだという挿話がある（大槻如電『新選洋学年表』一一四頁）。

㉒ 渡辺崋山「慎機論」「躾舌或問」「躾舌小記」「崋山書簡集」（抄）（『大日本思想全集』第九巻、三二七―四五二頁）、同：同右、「西洋事情御答書」「和蘭陀風説書」「日書」「書簡」など（『崋山全集』第一巻、明四三）、高野長英「鳥の鳴音」「戊戌夢物語」（『大日本思想全集』第九巻、二七七―三二四頁）、高野長運『高野長英伝』特に第八章以下、昭一八、佐藤昌介「蛮社の起源とその実態」（『日本歴史』六九）、同「蛮社の獄の真相」（『日本歴史』九二）。

㉓ 前掲註一〇・四六の諸文献。

㉔ 武内義雄『中国思想史』特に二四九―二六六頁、一九三六年、本田成之「朱子」（岩波講座『世界思想』第十二冊、三一一―三二六頁、昭五）、石田一良『近代精神の系譜』（『史林』三三―一）、丸山真男『日本政治思想史研究』二〇―三三頁、一九五二年。

㉕ 地誌が含有する諸問題――飯塚浩二編著『世界と日本』上・下、一九五七年、座談会「日本地誌の課題」（『地理』四―一）、大野盛雄「地誌」（『地理』六―一）、入江敏夫『新しい世界の地理』など。　尚、わが国とは社会体制が異なるが、「Советская География」（1960年, Москва. СССР）所収の諸論文、例えば И. И. Герасимов「География в Советском Союзе (Введение)」（同右五―一六頁）などには、社会主義国における現代地理学の課題についての興味ある見解がみられる。

㉖ 例えば、飯塚浩二『人文地理学説史』（昭二四）の「序文」において、若干この問題が指摘されている。

Chia-pien' 居延漢簡甲編, published by the Archaeological Institute of the Chinese Scientific Academy, shows the origin of about one thousand pieces among them. Then, this article, based on this pieces, tries to collect the wooden slips from Ulan-Durbeljin. As a result of this work, it becomes clear that Ulan-Durbeljin was the residence of *Chien-shui Hon-Kuan* 肩水候官 who belonged to *Chien-shui-Tu-wei-fu* 肩水都尉府 which seemed to be situated 3 kilometres south of Taralingin-Durbeljin.

A Character of Geographical Thought in the Late *Edo* Era

——on *Bantô Yamagata* and *Kôkan Shiba* 山片蟠桃, 司馬江漢——

by

Kikuo Ono

Our geography, through our very intercourse with the European countries since the 16th century that enabled us to explore the fields of astronomical theories, information of the world, and a world atlas, began to start for new development including the heliocentric theory through the rise of the so-called "*Rangaku*" or the study of the Dutch language.

From the end of the 18th century to that of the 19th, *Bantô Yamagata* 山片蟠桃 and *Kôkan Shiba* 司馬江漢 of *Chônin* 町人 or the townsfolk class, among those who studied such geography, began to form a new idea which included consciousness of the importance of geography, approach to the modern scientific spirit, and criticism against the feudal society. But the control of science by the shogunate government and various problems within the intellectuals picked off a bud of development from such bourgeois, and also geography was compelled to bear a burden as a science for the rulers. By observing geography in this period, we may have some suggestions for analysing the geography of our country after *Meiji* 明治 or at present.